



中央中だより

<第3号>



◇ 部活動集大成の舞台へ ―市総体壮行会開催― ◇

5月26日（火）、中体連市総体・吹奏楽・美術部のコンクール等に向けた壮行会を開催しました。各部から語られた「これまで支えてくれた方々への感謝」と「最後まで諦めない」という力強い決意表明に、3年生の最上級生としての自覚と誇りを感じ、感動を覚えました。

私からは生徒たちへ、「自分のため、仲間のため、支えてくれた方々のために最高の準備を」という言葉を送りました。今まで重ねてきた練習の成果を存分に発揮するためには、心身共に万全なコンディションづくりが必要で、それは自分のためだけでなく、一緒に戦う仲間や応援してくれる方々のためでもあります。共通の目標に向かって、スポーツや文化活動を通じて培った仲間との信頼や絆こそが、これからの人生の宝物になります。大会当日は、勝敗を超えて、自分たちの力を全て出し切り、悔いのない最高の時間（青春）を過ごしてほしいと願っています。

保護者の皆様におかれましては、日頃の温かいサポートに感謝申し上げますとともに、当日も熱いご声援をお願いいたします。



【各部からの決意表明】

◇ 主権者教育の実践 ―生徒総会開催― ◇

素晴らしい生徒総会でした。議案書をタブレットで確認しながら、真剣に説明を聞く生徒たちの様子から、この会に対する真剣な思いが伝わってきました。生徒たちには、日頃から、各委員会の活動が学校生活を支えていることに感謝しています。そして、生徒総会の中で活動が改めて確認され、その内容に加え、「何のためにその活動をするのか？」という活動の意義についても意識してもらうことができたように思います。

生徒総会は、生徒たちにとって、重要な学びの場の一つとなると考えています。「主権者教育」の実践（民主主義の体験）である選挙で選んだ代表に任せきりにせず、自分たちの意見を反映させるプロセスを経験することで、将来、社会に出て選挙権を行使する「主権者」としての基礎となると考えるからです。また、「当事者意識」の醸成（自分事化）には「単に決められたルールに従う」だけでなく、「自分たちの学校生活を自分たちでよりよくする」という意識を育てることが重要であると考えています。

学校では、日々、授業等の話し合い活動の中で「合意形成能力」の向上を図っています。自分とは異なる立場や考えをもつ人がいる集団の中で、話し合いを通じ、違いを乗り越えて納得（折り合い）できる答え（納得解）を見つける過程を学んでいると考えています。そうした過程で、生徒たちは互いに成長し、仲間や集団への信頼や感謝の心を育みます。それは、やがて集団（自分たちの学校）への誇りや愛着につながっていると思います。



【専門委員長からの活動報告】

◇ 6月の主な行事 ◇

- 1日～3日 3年生修学旅行（京都・奈良）
- 1日～19日 教育実習生受け入れ
- 6日～13日 部活動（市総体） 日程及び各会場等については、各部から
- 10日 校内弁論大会
- 24日～26日 期末テスト



地域を盛り上げる吹奏楽部 ◇

5月3日(日)の「ひとくらしのいちにち」(旧糸や通りいらっしやいませ)では、中央中、清流中、境野中の合同チームで集まった人たちに「マーチングドリーム」「Runner」「負けないで」の3曲を披露、また、5月10日(日)の桐生音楽連盟主催「春の市民音楽会」(シルクホール)に中央中の吹奏楽部が出演し、「天女の舞～能「羽衣」の物語によるラプソディ」と「ジャンボリミッキー」の2曲を演奏しました。吹奏楽部の活動は、地域を盛り上げてくれ、そして地域から愛されていると感じることができました。



【「ひとくらしのいちにち」で演奏を披露する合同チーム】

◇「はじめてのおつかい」から学ぶ ◇

バラエティ番組「はじめてのおつかい」をご存じでしょうか。1991年から30年以上続く人気番組です。単なる子供の成長記録というだけでなく、私たち大人にとっても子供への信頼と自立に関する深い学びがあると思われます。この番組に引きつけられるポイントを整理し、以下の3点にまとめてみました。

①子供たちの「小さな失敗・成功体験」が自信をつくる

子供たちは不安で泣きながらも、自分でパンを買えた、道を間違えずに帰れたという成功を積み重ねます。そんな子供たちを動かしているのは、「お母さんの風邪を治したい」「お父さんを喜ばせたい」といった、見返りを求めない純粋な愛情です。個人主義で損得勘定で動くことが比較的多いとされる今の時代、そのひたむきな姿は失いかけた大切なものを思い出させてくれ、心を浄化してくれます。私たち大人にとっても過去の自分の姿と重ね合わせることで、新しい挑戦には、失敗がありながらもスモールステップでの成功体験が不可欠であったことを思い出させてくれます。

②周囲の勇氣や信頼、愛情をもった「見守り」が子供たちの自立を促す

幼い子供にとって、一人で外に出ることは大冒険です。不安で泣きべそをかきながらも、自分の足で一步を踏み出す勇氣に、私たちは過去や現在の自分自身の挑戦や葛藤を重ね合わせ、応援せずにはいられなくなります。親が我が子を信じて送り出し、子供がそれに応えて自立の一步を刻む。この「親子の絆」の物語は、多くの視聴者が自分の子育て経験や、かつての自分自身と親の関係を投影しやすいため、深い感情移入を呼び起こします。大人(親)は、影でハラハラしながらも見守り、手を出したい衝動をぐっと抑え、子供を信じて「任せる」ことが、結果として子供の自立、責任感と能力を引き出す最大の支援になることを感じ取ることができるのだと思います。

③ 地域との「つながり」が、孤立を防ぎ安全の確保と安心感を与える

「おつかい」の道中、近所の人や店員さんがさりげなく助けてくれます。一人の自立は、実は周囲(地域)の人たちの温かいサポートがあってこそ成り立つという「社会の縮図」が描かれています。

私たちが本来持っているであろう「相手を信じる心」や「誰かの成長を喜ぶ本能」を呼び覚ましてくれるからこそ、この番組は世代を超えて多くの人たちに愛されているのかもしれません。

私はこの一連の過程(信頼と自立)が、子供たちの成長に少なからず寄与すると感じます。そのために、学校・家庭・地域が協力し、互いに当事者として、主体的に子供たちと関わり、それぞれが得意分野を発揮することができれば、すばらしい効果が期待できると思っています。

<文責 校長>